

教養コース 文章実作教室

文章を「作品集」「自分史」に 製本して残そう



教室 : ピアザふじみ 多目的ホール1
期間 : 6/17日～7/15日まで 全5回
時間 : 午前10:00～12:00

46期「文章実作教室」は表題の通り6月17日から1ヶ月に渡り永杉徹夫氏を迎え開講された。「文章を「作品集」「自分史」に製本して残そう」のテーマに従い「課題」が与えられ、提出原稿の添削指導等もあり、自分の作品を「製本化」する技術も学び、有意義な講座であった。



講師 永杉徹夫氏

永杉徹夫氏 プロフィール

もと毎日新聞の編集委員。エッセイスト。大学、短大、専門学校での指導歴は長い。「文芸埼玉」の編集委員。主宰する文芸誌「KODAMA」がある。

市民大学の「文章教室」の講師を今年で12年勤めていただいた。著書にエッセイ集「童心は老いずー詩人の風貌」「心に童謡を」「あまりにも花が」などがある



受講状況

文章実作教室 受講者数 登録13名

第1回 ～第5回まで各11名 延べ55名

課題作品提出者 10名

開催日程と内容

- | | | |
|-----|----------|---|
| 第一回 | 6月17日(土) | 文章を書く基本について 課題「味」について |
| 第二回 | 6月24日(土) | 中野翠 著 「コラムニストになりたかった」を通して視点、構成、叙、用語。を学ぶ。 課題原稿提出 |
| 第三回 | 7月1日(土) | 「コラムニストになりたかった」を通して文章の基本についての感想発表など。添削済み課題原稿返却 |

第四回 7月8日(土) 新聞コラム、同人誌「KODAMA」からのエッセイ紹介 課題
原稿再提出

第五回 7月15日(土) 製本、出版のプロセスについて。添削講評と合評



第5回講座講師 江口信二氏
「江口デザインセンター」

第5回講座風景 江口氏により
自分の作品を製本化するまでのプロセス—装丁・
印刷・予算・PC入力などを講義していただいた。

講座内容、永杉先生の講座について

まず講座の始めにあたり、書く上で大切なこととして

◎他人の評価を気にせず、自分のために書くことで苦手意識を取り払うこと

◎内容は自分のために、表現は読む人のために考えること

例えてみればエッセイは写真。小説は絵である。エッセイは本名の自分、事実であり、小説はエッセイを元にしても本名を変えたり人格を変えたりしてフィクションとして捉えられる。

古今東西のエッセイの歴史や作品から講座当日の新聞コラムまで、書く心構えから具体的な文章術を資料を通して示唆していただいた。

課題図書のように読んだ「コラムニストになりたかった」は中野翠氏の好き嫌いのアンテナがはっきりしているので、その感想は受講者それぞれで興味深かった。



永杉・江口講師と瀬戸担当理事

永杉先生ご自身のエッセイのなかで

退屈を紛らすためにさまざまな情報や刺激を求めるような時間の使い方ではない懈怠という在り方についてのことや、少年の目から見た世界、世界が素晴らしいと捉えるのは、それが素晴らしいと感じる真我について。また、気の重要性、静かに耐えるということについて言及された。

いずれも、永杉先生のエッセイはコロナや現代の世界の状況にあっても、人間の可能性を示すような先人たちの哲学、知恵を紹介して下さるものでありました。

毎週土曜日、午前中およそ1ヶ月に及ぶ講座の初回にテーマ「味」の出題は、受講者にとって味覚の味に限らず、味わいのある人物、人生の味、など書ける内容にするために「味」を織り込むことに苦労したようだ。

参加者永杉先生ご自分のエッセイに関するお話もまことに味のあるものだった。

受講者9名のうち2名を除いて、ほとんど10年前後の受講歴を誇るベテラン揃いであったので、今まで書きためた作品を作品集、本にするための具体策を、出版社をまじえて提案された。12年目の文章教室の節目、まとめとしての最終回となった。





報告 出井あや子